

2024年度 UPLB 英語コース受講者の声 (Batch 17*)

*2024年度は、春休み中の2025.2.22(土)出国、3.15(土)帰国の22日間、B17(2年生12名)とB18(1年生18名)の30名(うち理学部3名)が受講しました。授業以外は所属や学年関係なくワンチームで過ごし、平日午前午後各3時間の授業で英語表現力アップや発音を改善できるだけでなく、毎日2時間のUPLB学生との交流、IRRIやラゴ、自然史博物館など様々な見学行事を通じて、一生ものの経験、思い出、友人を得て帰ってきました。今年も10月始めに説明会を開き、中旬以降に受講者決定と航空券手配のあと、12月から出国までに計4回の事前前学修会と帰国後に事後学修会1回(参加必須)を行って研修効果を高めます。10月の説明会前に受講条件、費用(実質30万円前後)、研修内容、現地のことなど知りたい方は、農学部応用生命科学コース 金丸先生 (kng@kobe-u.ac.jp) または農学部教務学生係 (ans-kyomu@office.kobe-u.ac.jp) にお訊ねください。

◆フィリピン留学記～新しい自分との出会い～

農学部 生産環境工学コース 2年 K.K(KAMI)

突然ですが、皆さんは一度でも海外に飛び込んだことがあるでしょうか？僕は今まで海外に行ったことがありませんでした。もっと言えば、いまだ海外に飛び込む勇気がありませんでした。海外旅行ならまだしも、留学なんてとても考えられませんでした。ご飯は食べられるのか？無事に生きていけるのか？など、私の不安を挙げてとキリがありませんでした。しかし、海外には行ってみたいという気持ちがあることも事実です。この気持ちもあり、英語力向上だけでなく、今までの内気な自分の殻を破りたい、海外に行くことで自分の視野を広げたい、そんな思いからこのプログラムに思い切った申し込みました。この留学の目的は、英語で様々なことを話せるようになることや、視野を広げることでした。このプログラムを通してなにかが変わるきっかけになればいいなと思う程度でした。

まずは事前前学修会、私が一番印象に残ったのは1回目です。知らない人の前で自己紹介をし、初めてのメンバーと会話をし、ガイダンスを受け、本当にフィリピンに行くという実感がわいたことをよく覚えてます。しかし、私の不安はおさまることがありませんでした。

4回事前前学修会が終わると、ついに出発の日がやってきました。前日は眠ることができないくらい不安だつことを覚えています。しかし、現地に着くまで、そんな不安はすぐに消えました。結論から言うと、フィリピンでの3週間は本当にあっという間で、過ぎていく日々が名残惜しいほどでした。ここで、フィリピンでの日常と、特に印象深かったことをいくつかここに書いておきます。



↑カラオケ後の記念写真(GIグループで)

まずは授業、授業は平日に午前と午後でそれぞれ3時間ずつ行われます。授業が始まって最初にするのは、今日の授業内容ではありません。ダンスを踊ったり簡単なゲームをしたり、レクリエーションから始まるのです。その後内容に入っていきますが、そこでも次々に当てられていたり、前に出たプレゼンやロールプレイをしていたり、大量にお菓子をもらったりと、日本の授業では絶対にしないようなことをしていくのです。最初こそ驚いたし、授業中も先生が話していることが理解できなかったことも多かったです。発音もやり直されることも多かったです。しかし、英語漬けなので毎日ずっと英語を聴き、ずっと話しているうちに、最後の方になると話していることが理解できるようになり、発音も何回も練習することでコツがつかめるようになりました。私は中学や高校の時にセブ島の方とオンラインで英会話を授業がありました。実際に現地へ行き、生の英語に触れるのは違うと感じました。オンラインだと時間も限られ、日本にいるのでモチベーションが上がらないことがなによりも大きかったです。そのこともあり、フィリピンで英語を勉強するということがモチベーションアップにつながったと思います。

続いてGI、授業が終わった後に、現地の学生さんと約2時間遊ぶ時間が設けられます。初めは会話についていけなかったりずっと黙ったままです。しかし、何も話さないことが一番いけないことだと気づき、そこからは、簡単なことでもいいので、何かから話すようにしました。そうすると、ファシリテーターの方が笑顔で反応してくれ、会話が弾むようになり、今ではファシリテーターの方とは連絡を取り合うようになり、あの時勇気を出してよかったと思います。日が経つと、いつしかグループの枠を超えて、合同でカフェやピリヤードに行き、思いっきり楽しんだことは、かけがえのない思い出です。また、ファシリテーター同士で話しているときはタログ語を使用していたが、お互い全く分らない言語を使用しているのに、「英語」という世界共通の言語を使用することで、お互いに分かり合えるということが、当たり前のように不思議に感じました。そして、分かり合えた時は本当に嬉しい瞬間です。この時間は、外から日本を眺める非常に良い機会にもなりました。例えば、街を散策している際によく思ったのが、フィリピンはファストフード店が多いことに気づきました。また、道端で落花生などを売っている人も見かけました。おそらくこれらの背景にはフィリピンの貧困率が関係しているのではと考えました。ファシリテーターの方に聞くと、現地の人は日本というファミリーレストランを利用する感覚でファストフード店を利用するそうです。安価で高品質だが体には悪影響を及ぼすファストフード、より多くの人たちに食べってもらうには発展途上国で展開することが一番だと考えます。このことから、フィリピンの人たちは安価な食べ物しか食べられない状態の人が多くではないかと考えました。道端で食べ物売っている人も、お金を得るためにそのことをせざるを得ない状況なのではないかと思っています。そのことを考えていると、自分たちがどれだけ恵まれているのかを深く考えさせられました。そして、ジープニー(乗合タクシーのようなもの)に乗り、歩いていて思ったことは、日本のインフラ整備状態の良さ、空気の良さがよくわかりました。

そしてナイトセッション、夕食を食べた後、ガーディアンの方々が課題の添削やゲームをしていただきます。このナイトセッションが、私の英語力向上に最も貢献したと思います。授業で分からなかったことや、発音練習をしたときはナイトセッションで解決することを心掛けるようにしました。課題がない日は、英語で談笑したり、ゲームをしたり、タログ語版早口言葉を教えてもらったり、とても充実した時間を過ごしたと思います。その他にもホテルでみんなと談笑したことなど、何気ない瞬間も忘れられないです。このように授業やGIだけでなく、ナイトセッションの日々の努力の成果が最終面接の結果に表れ、Most Improved Student に選ばれた大きな要因にもなっていると今では思っています。また、UPLBの学生さんを見ていくと様々なことに関心のある学生が多いことに気づきました。例えば、ガーディアンの方々は、今までの方がしてこなかった様々なこと(合気道、水泳、日本語など)に挑戦していて、学ぶ意欲の高さに圧倒されました。そしてそれは私に、新しいことを学ぶ楽しさを思い出させました。さらに、フィリピンの人たちは家族を大切にすることがあります。

そしてそれは友達にも当てはまるのではないかと考えました。現地の方々とはみんな元気で温かいこともそうなのですが、常に私たちのことを気にかけてくれたことでも大きかったです。何かあればすぐに駆け付けてくれ、楽しいことを一緒に楽しんできたことなど、あらゆることを共有しました。つまり、「友達も家族のようなもの」というとらえ方ではないかと考えました。私が他の国でもなく、フィリピンという国に行ってきたと思える理由はここにあると



↑とある日のGI、行きつけのハン屋で複数のGIと合流

思います。その他にも、カラオケや旅行など、ここには書ききれないくらいフィリピンにはたくさんの思い出がありますので、心の中に秘めておきます。どんな感じなのかは、実際に行ってみて確かめてみてください！

時が流れ、ついに帰国する日がやってきました。その時、私の心の中には新しい自分がある気がします。今までの心配性で内気な自分ではなく、フィリピン生活で得た、自信に満ち溢れた自分です。UPLBの方々や、一緒に寝食を共にした仲間、誰一人欠けてもこの自分ではできなかったと強く感じています。私に関わったすべての人に感謝したいと思います。

フィリピン生活は、私にとってかけがえのない思い出となり、また自分を成長させてくれる場でもありました。最後のファシリテーターやガーディアンの方々からの手紙を読んだ時、その手紙の向こう側に自分がたくさん楽しんだって、笑って、踏ん張った今までの自分がいるような気がして、本当に充実した3週間を送った実感がしました。そして帰国して1週間がたった今、私自身の視野が広がりました。例えば、今回をきっかけに他の国へ海外旅行に行き、自然や文化の違いを肌で感じてみたいと思うようになりました。そして、行った先の国で英語をコミュニケーションのツールとして使用していきたいです。また、今後研究活動や仕事をするのであれば、海外を拠点にする事もあったと感じるようになりました。いずれも、出国前には思わなかったことです。

最後にこれを読んでいる皆さんへ、少しでも海外に行きたいという気持ちがあればこのプログラムは本当にお勧めです。金銭面や環境を理由に行かないことは本当にもったいないと思います。私自身申し込み時点で想像できないくらい行きたかったと心から思っています。迷ったら是非飛び込んでみてください！新しい自分に出会えると思います！

◆変化をくれた3週間

理学部 生物学科 2年 T.H(TOMO)

フィリピンで過ごした3週間は、正直無茶苦茶楽しく想像していた100倍くらい様々な思い出ができました。帰ってきて1週間ほどたった今でも写真を見返して思い出すほどに、大切でかけがえのない経験ができたと思っています。あの時応募して本当に良かったです。

とはいえ、実はこのコースに応募した際ははっきりとこのプログラムを受けてこうなりたい！と決めていたわけではなく、「このプログラム面白そうだし、留学に挑戦してみようかな」という曖昧な目標で応募しました。もちろん、英語のスキルを伸ばしたい！という気持ちや、恥ずかしがりやをなくしたいという気持ちもありました。しかし、性格も英語も3週間では変わらないだろうと心のどこかで思っていました。そのうえ留学に行く前は初の海外だったことあり、「体調崩さないかな。友達出来るかな。英語できるかな。」などの不安でいっぱいになっていました。



↑初めてのフィリピンでの夜ご飯

実際行ってみると、とてもとても楽しく、3週間は思ったよりも長く、とても濃い時間でした。英語のスキル面でも、性格面でも変化した自分に驚いています。まずは性格面についてですが、前に出る時の緊張がとても少なくなり、失敗しても大丈夫の精神が身に付きました。というこのプログラムの発表の機会が非常に多く、日本は受動的な授業が多いですが、フィリピンでの授業ではわかる人が挙手していく形で授業が進み、毎時間グループで台本を考えて劇をやったり、最後にはプレゼンを行ったり。授業だけでなくカラオケ大会もあり、

みんなそれぞれ踊ったり、本気で歌を歌ったり、人前に出て話す機会や自分をそのまま表現する機会が多くあり、もちろん失敗することもあるが、そんな経験の中で失敗しても大丈夫、自信をもって話そうという意識が生まれました。特にカラオケ大会は私にとって大きな変化をもたらす出来事でした。プログラムのクラスメイトがたくさんの人の中で自分を表現し、楽しんでリリリで歌っているのを見て、自分もやりたい！という気持ちが生まれ、30人以上いる人前で初めてありのままの自分を表現する機会になりました。また、一緒にプログラムに参加したみんなが温かく見守ってくれて「ありのままでもいいんだ」という自信につながりました。今では前にも人の顔を見ながら話すことや落ち着いて話すことができるようになり、前に出る時特有のそわそわ感や不快感がなくなったことを実感しています。

そして、英語のスキルについては特に発音と、咄嗟に文章を作る力が養われたと感じました。発音に関しては留学前から自信がなく、1週目は現地の学生に発音がありよくなかったため、聞き返されることばかりで、悔しい思いをしたのを覚えています。その悔しさから伝わる英語を話してスムーズに意思疎通を行いたいと思い、授業で習った発音を夜寝る前や現地の学生のガーディアンの方に聞いてもらったりしながらなんとかなるよう練習をしました。勉強に手伝ってくださった現地の学生の方や先生方のおかげで、自分で気づいていなかった発音の苦手部分が多く見つかると、その練習を友達の発音を聞いたりするなどで吸収できるものはすべて吸収するつもりで、練習を行いました。その結果、最終週では聞き返されることがなくなり、スムーズに話を進めることができるようになり、とてもうれしかったです。

文章作成能力もUPLBの学生であるファシリテーターの方との会話やナイトセッションでのガーディアンの方との会話の中で成長していききました。日本にいたころは英語を話す機会があったとしてもあらかじめ台本をきめてそれを覚えて読むことが多く、現場で英語を作る機会がそこまでなかったため、初めの方は聞かれても言いたいことをすぐに英語に直すことができず、時間をもらうことが多かったんです。ただ、時間をかけて待ってもらっても申し訳ない上に、時間をかけすぎると次の話題に行ってしまうこともあったので、早く文章を作りたいたい、なるべく英語で考えるよう心掛けた。完全に英語で考えることは難しかったですが、授業の時間やGIの時間、ナイトセッションなど英語に触れる時間が一日の中で非常に長かったため、英語での思考を行っていることが増えていききました。また、GIやナイトセッションで楽しい会話を英語ですること、英語への苦手意識が消え、学びたいという意欲も生まれました。そんな毎日のなかで、終わった今考えると、初めに比べ英語がスラスラ出てくるようになり、昔のことは過去形を使って文章を表すことや、思っていることを単語ではなく文章で伝えることがだいぶできるようになったと感じます。



↑最後のフィリピンでのお昼ご飯



↑ カラオケ大会とキングとクイーン

上記で挙げたような成長を感じたことはもちろんですが、何よりも楽しく、3週間とは思えないほどの大切な思い出がこの留学を通して得られることができました。あの時挑戦してみようと思っただけで本当に良かったです。

日本とフィリピンでとても大切な仲間に出会えて、同じ時間を過ごして笑いあえてとても楽しくかけがえのない時間を過ごせました。皆さんありがとうございます。

そして今応募するか悩んでいる方は挑戦してみることを強くお勧めします。本当にみんなが楽しめてそれぞれが発見や成長を感じることのできるプログラムになっています。どんなことも案外何とかなるのでとりあえず挑戦してみてください！絶対楽しいです！



↑ Guided Interaction (GI)でファシリテーターとみんなで 左はカラオケ、右は Jeepney



↑ クロージングセレモニーの様子

◆フィリピンに三週間。どうなるのか全く想像できなかったからこそ、飛び込んでみる意味があった。農学部 生産環境工学コース 2年 Y.A(AKIHITO)

留学経験も無ければ、そもそも日本を出たことすら無かった私は、この留学プログラムの存在を知ってすぐに参加を決意しました。「英語をもっと話せるようになりたい」「友達をたくさん作りたい」といった漠然とした期待を抱くと同時に、「フィリピンで三週間過ごす」という未知に未知を重ねるような内容に、不安を感じていたのも覚えています。

結論から言えば、そんな心配は不要でした。私はこのプログラムを通して、時間がいくらあっても語り尽くせないほど沢山の経験と学びを得ました。この体験記では、その中でも特に・・・という三つ、「アクティブになること」「人の温かさ」「世界が広がる」について述べます。

まず、「アクティブになること」。例えば毎日の授業は、英語の発音や簡単な表現の練習から始まり、最終週では寸劇を作ったりプレゼンテーションをしたりと、てんこ盛りの内容になっています。そして、ほとんどの授業がゲームやダンスから始まるのです！皆で体を動かし、笑い、楽しい雰囲気生まれることで、授業にも積極的に参加しやすくなります。また発言を求められる機会が多くなり、「考えたことを実際に英語で話す」という留学前は高かったハードルが日に日に下がっていくのを感じました。

自分から英語を話す機会は、授業の中に留まりません。例えば、留学先のフィリピン大学ロスバニョス校(UPLB)の学生(Student Facilitator)と一緒にキャンパス内外を散策する、Guided Interaction (GI) という時間が毎日授業の後にあります。カフェ、ショッピング、カラオケなどを楽しむ中で、Facilitator に色々なことを聞いてみたり、雑談したり、コミュニケーションを重ねていくうちに、自分ではっきりと違いが分かるくらいずっと英語が出てくるようになりました。そして夕食後はナイトセッションという時間があり、UPLBの学生(Student Guardian)にアドバイスを貰いながら、授業で出された課題を進めたり英語の発音を更に練習したりと、ここでも英語だけの時間を過ごすことができます。

初めのうちは上手く言葉が出てこず、他人に話しかけるのに躊躇してしまうことが多かったのですが、英語を話さる日々を過ごしていくうちに、初対面の人もすぐに仲良くなれるくらい英語でコミュニケーションをとることができるようになりました。このアクティブさは、私がプログラムで得た大きなことの一つです。

次に、「人の温かさ」です。先ほど、UPLBの学生を中心に色々な人と話して仲良くなれたと書きましたが、その理由にはフィリピンの人たちのフレンドリーで温かい性格も大きく関わっています。先生方も Facilitator も Guardian も、明るい笑顔と高いテンションで私たちを迎え入れてくれて、プログラム開始時に私が抱えていた様々な不安は一瞬で吹き飛んでいきました。特に Facilitator や Guardian は、決められた交流の時間外でも一緒に遊びに行ったり、ホテルの共有スペースで雑談したり、SNSで互いにリアクションを送り合ったりと、瞬間に仲良くなりました。これは神大生同士でもそうで、新しいこととずくめの毎日と一緒に乗り越えていくうちに、どんどん仲が深まっていきました。

なかでも印象に残っている出来事を二つ紹介します。一つ目は KARAOKE CHALLENGE です。皆

の前でカラオケを歌うイベントで、Facilitator・Guardian・先生方が総出で参加するこのプログラムの目玉の一つです。フィリピンに到着してから一週間経っておらず、緊張感もありながらのスタートでした。しかし、ひとりひとりの歌に合わせて、Facilitator を中心に減茶苦茶盛り上がり、スマホのライトをペンライト代わりにして感動的な雰囲気を作り出したり、あちこちで歌声が上がったりと、全員が一丸となって楽しんだ時間になりました。これがきっかけで自分の殻を破ることができた、いい意味で吹切れることができたという人が多かったと思います。



←(写真1: KARAOKE CHALLENGE 後、GI グループで記念撮影)

印象に残っている二つ目のイベントは閉講式です。こちらもプログラム関係者のほぼ全員が参加し、式典中に

神大生は6人ずつの班に分かれて英語での寸劇を行いました。私たちが受けた講義をテーマにした班、休日の trip を振り返った班、バナナをめぐる争いを繰り広げた班など、それぞれのユニークな経験が色濃く反映されていて、最終日にふさわしい盛り上がりでした。閉講式で自己紹介をした時、ステージの上から皆の顔を見て、皆と仲良くなれるだろうかと緊張でいっぱいでした。閉講式で、同じステージ上から見ると皆の顔はともも明るくて、一人一人の間に沢山の思い出があっただけで…あの温かい雰囲気は、一生忘れられません。

最後に、「世界が広がる」について。これは、フィリピンに在る間は勿論ですが、日本に帰国してから強く感じていることです。価値観が変わる、世界が広がる、という点は、留学のメリットとして良く挙げられています。実際、ジープニーや、UPLB のキャンパス内を闊歩する野良犬たちや、見たこともない色とりどりのフルーツなど、日本では決して見られないものでない経験は数多くありました。そして何より、この留学プログラムを共に過ごした29人の神大生の仲間、UPLBの学生たち、先生方、その他多くの人々と出会ったことで、私の「世界」はとてつもなく広がったと確信しています。今まで自分が歩んできた道のりだったり、今回の留学に対する動機だったり、将来のビジョンだったり、話を聞いていて刺激を受けたことが何度もありました。

そんな個性豊かな人々に揉みくちゃにされ、新たな自分を発見する日々の中で、私は自分の「当たり前」がいかに不確実で信頼できないかを学びました。周りがそうするから、それが当たり前だから、私もそうしよう。それはすごく楽なことです。私自身、今まで自分の人生のほとんどの場面でそうしてきたと思います。その結果、本当は何をやりたいのか、絶対に譲れないものは何か、といった質問に私は自信をもって答えることができないことに気がきました。

「当たり前」は、場所によって、時によって、とても簡単に変わってしまいます。どんな環境でも変わらないのは「自分」です。フィリピンで出会った人たちは各々が強い芯を持っていました。このことは、事後学修会で触れたメンバーが何人かいたように、私の印象にも深く残っています。

帰国後、私の譲れない部分は何かだろう、これから何がしたいのだろう、と、バッグにバンバンに詰まった土産や二千枚以上ある現地で撮った写真たちを眺めながら、じつり考えました。この留学を通して、英語でコミュニケーションをとることに自信がついて、全く知らない場所に飛び込むことの面白さを痛感しました。三週間も日本を離れると、きつどこかで帰りたいなと思うようになっていましたが、プログラム最終日には日本に戻りたくないとさえ思いました。

日本は素晴らしい国です。清潔で、ご飯は美味しい、治安は良い、世界に誇れる文化が沢山あります。それでも私が帰りたいと思ったのは、先ほど述べたフィリピンの「アクティブさ」や「人の温かさ」や、そのほか沢山のものを心の底から好きになったからでしょう。留学前まで全く縁のなかった場所がこんなにも大切な場所になるとは、想像すらしなかったことでした。そして、そんな自分を発見できたことに面白さを感じました。

これから私がしたいことは、もっとも自分の世界を広げることだ、と私は結論付けました。未知の世界を訪れて色々なことを体験し、元いた場所に帰って自分の地図がいかに広がったか、あるいはどんな風に見えるようになったかを確認する。この一連の行為の楽しさと大切さを、今回の留学を通して学びました。それらはそのまま、自分の強い芯になりました。

新たな環境でより幅広く、より深い知見を得るには、コミュニケーションが必要不可欠です。そして、この留学プログラムの最も良い点の一つは、最強のコミュニケーションツールである英語を、自信をもて使えるようになることです。私は、自分の世界をぐんぐん広げていく、その最初の一步を大きな武器とともに踏み出すことができました。二歩目、三歩目と順調に歩き出していく予定ですが、いつか記念すべき一歩目の地に戻ってくるかも知れません。その時には、本プログラムで出会った最高のメンバーたちと、今よりはるかに大きくなったお互いの地図を広げて見せ合いながら話をするのがとても楽しみです。



↑ (写真2:閉講式で寸劇中に記念撮影)

2024年度 UPLB 英語コース受講者の声 (Batch18*)

*2024年度は、春休み中の 2025.2.22(土)出国、3.15(土)帰国の 22 日間、B17(2 年生 12 名)と B18(1 年生 18 名)の 30 名(うち理学部 3 名)が受講しました。授業以外は所属や学年関係なくワンチームで過ごし、平日午前午後各 3 時間の授業で英語表現力アップや発音を改善できるだけでなく、毎日 2 時間の UPLB 学生との交流、IRRI やラボ、自然史博物館など様々な見学行事を通じて、一生ものの経験、思い出、友人を得て帰ってきました。今年も 10 月始めに説明会を開き、中旬以降に受講者決定と航空券手配のあと、12 月から出国までに計 4 回の事前学習会と帰国後に事後学習会 1 回(参加必須)を行って研修効果を高めます。10 月の説明会前に受講条件、費用(実質 30 万円前後)、研修内容、現地のことなど知りたい方は、農学部応用生命化学コース 金丸先生 (kng@kobe-u.ac.jp) または農学部教務学生係 (ans-kyomu@office.kobe-u.ac.jp) にお訊ねください。

◆大きく成長できた19歳の春

農学部 応用植物学コース 1年 F.H(HITOMI)

今、この体験を読んでいる皆さんは、どんな内容の留学なのか、どんなことを体験できるのか、本当に自分のためになるのか気になっていると思います。そんな皆さんに私は声を大にしてこのプログラムに参加することをお勧めしたいです。このプログラムを通して私は、英語スキルの向上だけでなく、自分の物事の考え方や価値観も大きく変えることができました。

私がこの UPLB プログラムのことを知り、参加してみたいと思ったのは神戸大学に入学する前の高校三年生の時です。当時この大学に入ろうか悩んでいた時に、ホームページ上でこの留学プログラムを発見しました。高校二年生のときに地理の授業で「緑の革命」を習ったことでイネに興味を持っていたため、緑の革命という世界の歴史を大きく動かした事件に携わっている IRRI(国際稲研究所)という施設があるということを知っていました。ネットで神戸大学の UPLB 留学プログラムの内容を見た時に、この IRRI を見学することができると知り、こんな機会があったにないと思い、神戸大学農学部に行くことを決意しました。

しかし、無事神戸大学農学部に入學でき、このプログラムに参加できることが決まったあとも、肝心の UPLB のことやフィリピンのことは何も知りませんでした。最初のフィリピンのイメージは「バナナが有名どころだよ…」だけで(笑)特にこのプログラムで行くフィリピンが私にとってははじめての海外であり、初めての海外がアメリカやオーストラリアではなくアジア圏の国で、しかも期間も 22 日間と長い不安もありました。衛生面や治安面のことも懸念していましたが、自分が不安に思うようなことはほとんどありませんでした。毎日現地の方のあたたかさになれることができ、一生忘れられない経験を得ることができました。

次にフィリピンでの生活について述べていこうと思います。この UPLB プログラムは語学研修なので、基本的に月曜から金曜までは大学で英語の授業を受けます。午前と午後それぞれ三時間ずつ、プレゼンテーションのやり方や海外で使えるイディオムなどを学びます。もちろん指示や説明はすべて英語なので、最初の方は内容を聞き取ることで精一杯で毎日がとてもハードでした。しかし、教授が私が指示された内容が理解できなかつたり、間違えて理解してしまっても決して責めたり嫌な顔をしたりすることなく、丁寧に説明してくれました。この「まちがえてもOK」という雰囲気のおかげで、最後の方の授業になるにつれ間違ってもいいから自分の意見をほかの人達に聞いてほしいと思えるようになります。また、日本での授業形態と違い授業の初めには、ウォーミングアップと称してちょっとしたダンスをしたりミニゲームをしたりします。一緒に授業を受けるメンバーとの仲も深まり、なにより楽しんで授業を受けることができます。ほかにも授業内ではよく、数人のグループに分かれて授業で習った内容を用いてロールプレイ(寸劇)を行います。制限時間内に、いかにほかのグループよりも面白くて手の込んだロールプレイができるかが鍵となります。このロールプレイの集大成は、閉講式での大勢の関係者の前で発表会です。最初は人前で演じるのが恥ずかしかったのですが、最終的には気持ちよめて英語で演じることができるようになりました。

次に紹介したいのは、GI(Guided interaction)とナイトセッションです。GI では、授業が終わった後に UPLB の学生(Facilitator)と UPLB の周りのお店でご飯を食べたり、公園でカードゲームをしたりします。いわゆる放課後活動のようなものです。私がとくに印象に残っているものはカラオケです。UPLB があるフィリピンのロスバニョスにはカラオケ施設が多数あり、たくさんの洋楽を歌うことができます。洋楽に疎く決して上手に歌えただけではありませんでしたが、Facilitator をはじめとする GI グループのメンバーが盛り上げてくれ、恥ずかしがらずに歌うことができました。その時の楽しさは今でも胸に残っています。Facilitator の二人とは、かけがえのない時間を過ごすことができました。私にフィリピンについてのあれこれを教えてくれて、私の拙い英語で話す日本の事についても真摯に耳を傾け、興味深く聞いてくれました。彼女ら二人とは日本に帰った今でも連絡を取り合う親友です。

ナイトセッションでは、四人の SG(Student Guidance)が私たちの授業内に出た課題を見てくれたり、一緒にミニゲームをしたりします。四人ともそれぞれ違った個性があり、どの人と話しても新しい発見が得られるのも楽しいです。

次に定期的に開催される Trip について紹介します。留学期間内に数回程度、すこし遠出をして観光をします。今年では Manila, Villa Escudero, IRRI をはじめとする研究施設の見学等がありました。Manila, Villa Escudero ではフィリピンのこれまでの歴史やキリスト教について深く学ぶことができました。特に印象に残った Manila での出来事があります。Manila では観光地の周りに露店が多数並んでいましたが、ある一つのお店では家族のみで商売をしていたようで、商品が陳列されている横にブルーシートのようなものがひかれ、その上に女の人が横たわっており、子供が座り込んでいました。二人の周りにはハエがたかつかっており、その二人を見た時「ああ、これがフィリピンのもう一つの顔なんだ」と思いました。私が普段接している Facilitator や SG とは雰囲気やたずまいが少し異なりましたが、嫌悪感や不快感などは一切感じず、これもフィリピンなのだ、これが海外なのだとその時ストンと胸に落ちたのを覚えています。

高校の時からずっと行きかった IRRI にも行くことができました。大学で英語を教えてくれている先生や、Facilitator は私たちに合わせてゆっくりと英語を話してくれたのですが、研究所の方はネイティブスピーカーのスピードで話を進め、テクニカルな用語も多数出してくるので内容を理解するのがとても大変でした。しかし、実際に研究しているところや稲の保管室のようなところも大変案内してくれたので、とても貴重な体験をすることができました。

このように、これ以上ないかけがえのない体験ができ、精神的にも大きく成長できる濃厚な 22 日間の UPLB プログラムですが、楽しく終えることができたのは 29 人の仲間が存在があるからです。一か月近くの留学に 30 人規模で参加することは珍しいかもしれませんが、しかし、30 人と一緒に大人数で過ごしたからこそ味わえたものもたくさんあります。寝るとき以外、男女関係なく常に一緒に行動することは大学生になると貴重なものになります。同じ学部について同じ授業を受けていたはずなのに、ほとんど話したことなかった人たちと、日本語が通じない世界にともに飛び込んで同じ経験をするということは格別なものです。ホテルの部屋で現地のお菓子を買いパーティーを開催したり、格闘技の得意な友達に技を教えてもらったり、みんなで深夜に夜食を食べて大騒ぎして怒られたり、今、私の携帯には仲間たちと一緒にすごした濃厚な 22 日間の思い出が写真となって残っています。

それらすべてが大切な宝物です。

フィリピンでの経験を通して、私の考え方が変わりました。それは「やりたいとおもったことはとにかく挑戦してみる」ということです。私の考え方を変えてくれた人物の一人に SG のヨハンがいます。彼は、日本のことが大好きで日本語を独学で勉強し、日本人もびっくりするくらい流暢な日本語を話します(笑)彼は日本語だけでなく、水泳もピアノも独学で学んでいます。彼のあくなき好奇心と、お金がないとか練習する場所がないなどの環境を言い訳にせず、やりたいことはとことん挑戦してやるチャレンジ精神に感銘を受け、自分も興味を持った物には積極的にチャレンジしてみようと思うようになりました。

この UPLB 留学プログラムは自分の考え方や価値観が変わり、人と大きく成長できる行って損なしのプログラムになっていると思います。ちょっとしたでも興味がある方はこれを機に参加することを強くお勧めします！



◆迷っているなら行ってみよう、行けばわかるさ。

農学部 応用植物学コース 1年 KR(REKIA)

私がこのプログラムに参加した理由は IRRI に行ってみよう、世界をもっと見てみたいと思ったからです。なぜなら、私はイネの研究に興味を持っており、将来海外で働きたいという気持ちがあったからです。事前学習会の時は、そこまでめっちゃ仲のいい友達ができるわけではなく、気がつくともっと出た国を迎えていました。そんな中で始まった三週間は気づくとあっという間で、とても素敵な思い出となりました。そんな素敵な思い出を、普段の生活、週末のイベント、今回のプログラムを通して感じたこの順で話していきます。

平日は午前、午後三時間ずつの授業を受けました。午前中は文法や語法の授業を受けた後グループに分かれて寸劇をほぼ毎日行っていました。初めの方は何をしたらいいかわからず戸惑いや迷いがありましたが、気づくと次の寸劇ではどんなことをしようかと楽しんできていました。この時間では英語の表現力だけではなく、周りの人を喜ばせる力、目の前の人を笑顔にする方法を学ぶことができました。午後の授業では発音の練習をしました。みんなの前でやり直しをさせられた発音練習の時間が貴重な時間だったとはこの時はまだ気づいていませんでした。発音練習の後はスピーチやプレゼンをしました。この時間では前にも立てて発表する能力だけでなく、自信をもって自分の伝えたいことを聞き手に伝える力、身振り手振りなど言葉で伝える以外の部分の大切さを改めて実感することができました。景品としてバナナが登場した授業があり、とてもフィリピンを感じておもしろかったです。授業の難易度はそれほど高くないと感じたので授業を日一杯楽しむことができました。また、授業の初めには必ずと言っていいほどダンスや歌を歌う場面があり、はじめは恥ずかしさも全力です。このときはできなかったが、慣れくるとみんなでも楽しみな場になりました。

放課後は三、四人の神大生と二人の UPLB の学生(ファシリテーター)が一つのグループになって大学構内や周辺を散策する GI と呼ばれる時間が設けられています。その時間にはカフェやパン屋に行ったり、買い物したり、ビリヤードを楽しんだりしました。印象に残っているのは、Westea というカフェで、社会学を専攻しているファシリテーターと日本とフィリピンの政治について話をしたことです。フィリピンの現状とフィリピンの大学生の政治に対する問題意識を感じることができたのもとても興味深かったです。そして、彼らの興味のあることに対する強い好奇心と、それらを探索する姿勢に何より驚きました。毎週のようにテストがある生徒もいたり、放課後、普段は勉強していると言っていた生徒もいました。そんな中で自ら行動し他国から来た我々と交流する姿はとてもエネルギーが自分も頑張ろうと強く思いました。また、ファシリテーターに教えてもらった Michal's Kitchen というケーキ屋さんのスイーツやクッキーがとてもおいしく、何回も通うほどお気に入りのお店になりました。そして、ビリヤードもファシリテーターに連れられて初めて挑戦しました。思いのほか楽しく、最後の週は毎日行きました。また、放課後にラボツアーが設定されている日もありました。私は、生物系のラボを見学しました。そこでは、川から取ってきた藻を瓶に入れて培養し、その藻の働きを観察しているラボやフィリピンの絶滅危惧種の魚を研究しているラボ、そして東南アジアらしいココナッツを研究しているラボもありました。それぞれのラボの学生はとても楽しそうに研究に励んでいました。日本にいた時には触れることができなかった研究の話を開けてとても面白かったです。

そして、夕食の後は Night Session(NS)というこれも UPLB の学生(Student Guardians SG)とゲームや課題をしながら英語を学びました。NS は自由参加なのですがほとんど毎日あるので毎回参加している人もいました。私は、毎日参加したわけではないのですが、参加した時は SG との距離も近く気軽に質問もできるで SG とだけではなく神大のみんなとも、とても仲良く話した時間だったので良かったです。みんなで課題をしたときは英語の間違いを正してもらったり、それ以外の時はトランプを使ってゲームをしたり、日本とフィリピンのお菓子の試食会をしたりと授業では味わえないような学生目線の交流ができ、とても楽しかったです。また、NS 後にみんなで見た星はとても綺麗であの光景は忘れることができません。フィリピンにいた間、夕食後はほぼ毎晩外出していました。その時間にもたくさんのお会いがありふりがありました。まずは、ほとんど毎日行っていたスーパーではレジ打ちの人や店番の人と仲良くしました。また、スーパーでは買物をしてもらった UPLB の学生にその日のお菓子を聞いたり、レジに並んでいる時に後ろの学生に話かけたりしました。今回のプログラムの最中、地元の人に話しかけるとほとんどの場合「アンニョン」と返され韓国人と間違われました。他の国の人に間違われる経験をしたことがなかったのでとても良い経験になったと同時に、日本人だよというところから話の輪が広がり結果的に仲良くなることができました。また、露店の果物屋のお父さんは何回も行くうちに顔見知りにな





り、行くだに果物の値段は下がっていききました。最終的にはマンゴが100円ちよいで買えるようになり、現地の人の仲間を大切にしている国民性が垣間見えて嬉しかったです。また、通っているうちに知り合い、仲間とみよてくれたこともすごく嬉しかったです。

週末のイベントで特に印象に残っているのは、学内ツアー、Villa Escuderoというリゾート地とMarket tourです。学内ツアーで面白かったのはIRRIとカラバオセンターです。IRRIでは種子の貯蔵庫を見学した後、職員の方に質問をする時間がありました。私はGMOに興味があったのでフィリピンでかつて盛んに栽培されていたGMO作物のゴールデンライスについての質問をしました。ネットで調べた本を読むだけでは知ることのできなかった現地の人の見解を知れたのでとても面白かったです。カラバオセンターではカラバオという農耕に使用される水牛を飼育しており、その乳からチーズを作ったり、カラバオのさらなる有用性について研究していました。カラバオはとてもかわいく、どこか神大で飼っている牛に似ているような気がしました。Villa Escuderoはコナツツとサトウキビで富を築いたEscuderoが集めた世界各国の骨董品を見たり、プールで泳いだり、日本では体験できない一風変わったバイクギンを楽しみました。彼のコレクションは陶器から、潜水服まで与えられた時間は見るとせないほどたくさんのもが置いてあり、そのどれもが物珍しくとても楽しかったです。また、プールでは、平日はUPLB周辺での活動なのであまり感じられなかった南国でのバカンスを感じられたのでリフレッシュすることができました。バイクギンは足元に水が流れている会場でフィリピン料理を堪能しました。Market tourでは現地の人が普段利用している市場に行きました。ここでは、食料だけでなく、日用品やそのほか多くのものが売られていました。一番驚いたことは、生鮮食品が売られていたコーナーです。そこでは日本でもよく見るお肉だけではなく、豚の頭や鶏がそのまま売られていたりしていました。日本では見られない光景にとても驚きました。また、二階にはパロンと呼ばれるパイナップルの繊維でできたフィリピンの正装が売られていました。私はそこでパロンを購入し、その後の閉講式など式典に着ていきました。ファンリレーター含め現地の人は私がパロンを着ていることをとても喜んでくれました。

ここまで、体験記を書いてきて最後にこのプログラムを通して感じたことを書きます。このプログラムを通して自分自身とても成長することができました。日本では、周りに合わせる、そのためには自分の意見、考えを表現することも控えるという空気がありますが、フィリピンで出会った彼らは全く異なり、自分の意思を持ち、したいことはしたい、そうでないことはそうでないとはっきり伝えます。それが必ずしもいいことであるとは思いませんが、少なくとも自分の意見を表現する、表現しようとすることはとても大事なことだと思います。また、互いを理解するにあたり自分の意見を相手に伝えるだけではうまくいきません。相手の考えを聞くことも大切です。その点では、日本にいた時よりも、相手を受け入れられるようになったと感じます。なぜなら文化や背景だけでなく言語も物事の捉え方も異なる人たちと意思疎通するまてやお互いを理解することは簡単なことではありません。しかし、受け入れようとするところがとても大切だと感じました。そして上述したようにそれを言葉にして相手に伝えるというところもとても大切だと感じました。その点では、このプログラム中に現地の言葉であるタガログ語をいくつか覚えることができたのはとても良かったと思います。さらに、現地の人に話しかけるときは現地の言葉であるタガログ語で話しかけた。すると、タガログ語を知っているのかという感じで向こうの人も我々に興味を持ってくれました。相手の話す言語を勉強することは最も簡単に相手の文化や慣習にリスペクトを示す方法だと思いました。これは、単に違う国の人と意思疎通を図るために英語や他の言語を学習すると思っていた私の考えを変えてくれました。

また、フィリピンの人は、仲間を大切にすることが強く感じました。それは、彼らが言葉や態度でもそのような行動を示すからだと思います。フィリピンで過ごす中で最も感じたことは、みんながとても楽しそうだったことです。先生やファンリレーターはもちろん、街を歩いている人はみんな楽しそうに見えました。もちろん、よく笑い冗談を言い、歌やダンスが好きな陽気な国民性もあるとは思いますが、それでもみんな楽しそうに生活していました。そんな彼らを見て、もつと自分を表現したい、もつと楽し生きていんだと思えるようになりました。これらの影響かどうかはわかりませんが、ホテルに帰った後は毎日のようにみんなで楽しくお話をしてお菓子を食べてかげがえのない時間を過ごすことができました。上述したように、この三週間はこの本堂にあつたような時間で夢のような時間でした。もちろん楽しいことばかりではありませんでした。ホテルの浴室やトイレの清掃は最初の方はきれいでしたが、気づくと清掃をお願いしないときれい状態になりました。お願いすると彼らは快く笑顔で対応してくれました。こののんびり加減も彼らの国民性なのかと次第に受け入れることができるようになりました。また、相手の気持ちを察する日本人は違い、自分の意思を言葉にして伝えたいと自分の気持ちは伝わらない、言葉にして相手に伝えることの大切さを改めて感じるようになりました。これらの経験を通して、これからはもつと笑顔で、否定的ではなく肯定的に目の前のことを捉えて全力で取り組んでいきたいです。

最後に、このプログラムに関わってくださった金丸先生をはじめ林先生、茶谷先生、土佐先生、足助先生、その他UPLBの先生、ファンリレーター、ガーディアンズ、一緒に参加したみんなを含めすべての人に感謝します。このような素敵な時間をいただきありがとうございました。このプログラムはフィリピンのことを知れるだけでなく、一緒に行った仲間ととても仲良くなれたし、大学では高校よりも距離が遠い先生とも仲良くなることができました。文面では表せられない、写真には写らない素晴らしい経験や思い出をいただきました。もし、今参加を悩んでいる人がいるならば必ず応募してみてください。強くお勧めします。そして、このプログラムに参加する前ではなく参加した後に、参加してよかったかどうかを考えてほしいと思います。ここで、私の体験記を読んで下さりありがとうございました。少しの勇気があなたの人生を豊かにすることを祈っています。

◆英語を学ぶのになぜフィリピン？
農学部 応用生命化学コース 1年 Y.A(AKARI)

「たった3週間でも今後の過ごし方を変えてみたくないですか？」

まず初めにこの1文を見てどんな内容なのだろうと興味を持ちませんでしたか？この興味を引く書き方、細かく言うプレゼンテーションの仕方も私はこのUPLB農学英語研修で学びました。この研修に参加したいと思った動機はただ単に海外に行ったことがないから行ってみたい、英語が話せるようになってみたいというごくありふれた動機でした。そこで私がこのプログラムを通して掲げた目標は「バイトで外国人のお客さんが来た時におびえず英語で話せるようになる！」でした。結論、大いにこの目標は達成できました。正直この3週間だけで聞かれた内容をペラペラと返せるようになる成長を得られたわけではなく、別の観点での成長がこの目標の達成につながったと考えています。実際に先日私が外国人のお客さんの対応をすることになった際、今までは何か聞かれてわからなくて困った顔してお客さんに「Sorry,thank you.」とかわせてしまつたことや、自分が反応することなく別の言葉で言ってもらふ機会を待ち、「yes.」「no.」だけで済ませてしまつたことが多々ありましたが、留学後には何を言っているのかわからなければ「Could you say that again?」や「Could you please rephrase that?」といった言葉がばつと出るようになり、ポディーランゲージを交えつたなんとか伝えようとする返りにも表現を探せるようになるなどの英語の対応力が格段に伸びたと感じました。このとりえずやってみよう！不完全でも話してみよう！と思えるようになったのは授業で得たこと、GIの時間で会話を学べたことはもちろん、一番はフィリピン人の人柄、国民性が大きく影響したと思います。

ここでタイトルにあるように多くの人がフィリピンで英語を学ぶ必要性を感じていないのではないのでしょうか。私自身も「留学をしたい→農学部に独自のプログラムがある→たまたまフィリピンだった」

だけで多数の選択肢があればフィリピンよりメジャーな国(例えばオーストラリアやカナダ、アメリカ)を選んでいくがしています。留学に行く前、いった後も留学について話せばなんでフィリピンに行ったの？と聞かれることが本当に多々ありました。

まず簡単にフィリピン人について言うなら、明るい！元気！優しい！誰に聞いてもこの三拍子に尽きると思います。初めて私たちが現地の学生に出会ったのは1週目の月曜日の1人ずつ先生と面談を行うテストの時です。テストは1人15分ほどを2回繰り返して、自分の順番が来るまでの間別室でファンリレーター達とフィリピンで有名なゲームをしました。その時彼らのテンションの高さと、周りを巻き込んで楽しませる盛り上げ方に驚かされました。私はこの時に初めて自分の殻を破り、思ったこと、考えたことを受け入れてくれる環境であるのだと実感できました。フィリピン人の国民性に関して1つ思い出深かった経験があります。この研修での最後には午後の授業の2人の先生の両方において1人で全員の前で行うプレゼンテーションとデモンストレーションがあります。ただ、私は最後のプレゼンテーションで自分の想定していたようになり、かなり落ち込んだことがありました。その際に私のファンリレーターがすごく頑張っていたよ！今はまだ英語の学習の途中だから！私たちの自慢の友達だよ！本当に偉い！！などの逆に笑うようになってしまつたくらい褒め言葉をかけてくれました。授業の時でも日本と違ってゲームやダンスなどをして初めに体を動かすことが多明るい雰囲気先生方も常に英語を絶やさず、私たちが発表をしたらかならずポジティブな言葉をくれます。たとえ間違ったことを言っていたとしてもまず発言したこと、その主体性を褒めてくれた後に改善案を提示してくれます。このようなフィリピン人の何事にもトライしてそのトライすること自体に価値があるという考え方が少し消極的な日本人にもモチベーションになり、最終週には今まで周りを伺いながら手を挙げていた人もはじめから積極的に手を挙げるようになっていきました。授業では基本的に今までの日本の英語学習で学んだことや日常生活に使える内容を中心に取り組み、私にはそれがスビーキングを受験勉強でほとんど取り組んでいなかったため有用に感じました。これらが日常生活で使いやすいものであるため私はその日に学んだことを1回はGIで使おうと意識しており、それが後々の定着にもつながると今改めて感じられているので今後授業を受ける人にもなお勧めしたいです。また、発音の授業ではBATCH18は少し人数の多いクラスでしたがそれでも20名弱の少人数クラスで、一人一人よかつた点と改善点を挙げてくださり、自分では気づかない癖(私であればlとrの発音がうまくできていない、長いセンテンスを話すときにあー、えー、などの言葉を多用してしまう)ことに気づけたことは英語を中心に話す国で受ける授業であるからこそメリットであると思います。このような改善点が見つければ授業を経るごとにレベルが上がる前のロールプレイやプレゼンテーションに生かすことができ、細かい部分の改善点であれば毎日の19時頃か21時頃にあるナイトセッションでSGと練習することで相対的に英語力を伸ばすことができます。ナイトセッションでくいに思い出深かったのはSGたちとlとrの発音が苦手だと話したときに、「I really rarely read a book at a library.」というセンテンスを複数回練習し、舌を動かす練習をした方がいいと教えてもらったことでした。彼らは何度もう改善した方がいいかと考えて、うまく発音できるときは大きな達成感を得られ、明日の授業で発音することが楽しみにまりました。

冒頭の話に戻りますが、3週間でも今後の過ごし方が変わるというのは価値観の変化が大きかったです。SGやファンリレーターと関わり聞かれることや、授業で先生方から聞かれる内容では自分が興味のあることや経験したことなどを話せばそのことについて自分も深く掘りかれます。1つ意見を言っ「どうしてそう思うの？」「どうして好きなの？」と聞かれることに自分の考えの違はかきや興味・関心の薄さを痛感しました。日本では誰かが意見を言ってそれに共感しているだけでその場をやり過ごした経験や少なくともそのような場面を見かけたことがあると思います。ただそれが適用せず何に関しても必ず自分の意思や意見をもって取り組むことが習慣化されていることに感銘を受けました。私が調べたところ、近隣の大学において理系の学部でありかつ学部内で留学を募集しているプログラムは見受けられませんでした。基本的に留学するとなると自分で留学のために動き、様々な努力を要し明確な目的をもって留学に臨むことになると思います。本プログラムであれば、神戸大学の農学部・理数部に在籍しているというだけで参加の最低条件は満たされ、すべての人が何か変わるチャンスを持ち得ています。いい意味で海外に行ってみてみたい！なにか思い出をつつてみたい！そんな軽い気持ちで行くことができます。英語が得意な人であれば自分の英語を実践できる自信を得られる機会にあり、また英語が苦手なだけで成長したいと思っている人であれば必ずその気持ちがフィリピンから自然と英語力の成長につながり、またどのような人でも文化の違いが何か考えさせてくれるきっかけになります。

フィリピンで英語を学習することは英語力の向上だけでなくその日本人と対極的な人柄も相まって人間的に成長できると思います。このような人との出会いを通じて自分が変わるきっかけを得られると気づけたことはあらためてつながるツールとして英語を学習することの重要性を感じ、自分自身のモチベーションにもつながりました。この期間を通して英語学習でこれからはじめに取り組んでいきたいと考えていることは細かな発音の練習と単語の言い換え(特に感情表現)であり、細かな発音は今後のプレゼンテーションにも生かされ、感情表現は友達との関係を深めることに役立つと考えています。また、価値観の変化を経てこれからの大学生活において明確な目的意識を持つ取り組むこと、興味のないと感じられることでもなにか面白く感じられる点を見つける習慣をつけること、ちょっとした興味を持ったことには飛び込んでみることに、この3点を残りの3年間意識していきたいです。これらの英語学習、自分における変化を見だせばなんとこの留学でもっと自分のことを深く持つこと、意見を積極的に述べることなどのような形の今後の学習も意識し置きたいと感じています。

この3週間英語学習だけでなく、土日にはMANILA TRIPやVILLA ESCUDERO、UPLB TRIP、KARAOKE CHALLENGEなどのイベントも盛りだくさんで今まででは考えられないほど濃密で毎日が充実した日々でした。フィリピンの人と関わる以外にもほほ初対面の29人とともに過ごせたことも貴重な経験だと思っています。



英語の上達だけでなく、英語は関係なしに人前でもつと自信を持って発表できるようになりたい、プレゼンテーションがうまくなりたい、コミュニケーション能力を上げたい、そんな人にもお勧めできるプログラムです。ちょっとしたこのプログラムに興味を持ったことが第一歩なので是非飛び込んでみてほしいです！